

誘電体装荷ホーンアンテナ（シェーブトビームアンテナ）

1971 年（昭和 46）に、ホーン内壁に薄い誘導体の帯を装荷することで、軸対称の電界分布を発生させる誘導体装荷ホーンを開発した。極めて簡単かつ軽量の構造で、ビームがほぼ軸対称で、サイドローブの低いアンテナが実現できた。また、この誘導体装荷ホーンは、主ビームパターンを形成しても優れた交差偏波特性を持つという特徴を有していたため、インテルサット IV-A 号衛星に搭載され、グローバル形成ビームアンテナとしても実用化された。

出典：KDD 社史